

# あるナラティブ・セラピーにおける セラピストの立場と語りへの影響 —インターアクションの社会言語学的観点から—

饒平名 尚 子

## 1. はじめに

本稿では、アメリカにおいて録画された実際のナラティブ・セラピーのDVDをデータに用いて、セラピーの最初の部分を言語学的に分析する。カウンセリングではセラピストとクライアントの間でたくさんのことばがやりとりされ、ことばが重要な働きをなしていることは言うまでもない。ところが、セラピー・セッションを言語学的視点から直接分析することはこれまで少なかった。その理由として、一つにはデータの問題がある。実際のセラピー・セッションを録音録画することは、セラピーの性格上難しい。相談内容の守秘義務はもとより、録音・録画すること自体が、セッションにおける会話参加者の参加の構図に影響を与えてしまう恐れがある。したがってこれまでは実際の録音・録画ではなく、セッション終了後にセラピストがケースレポートとしてセッション中のやりとりを書いた記録が研究資料として使われることが実際の臨床の現場では多かった（森岡 2006）。また、会話のトランスクリプトの問題もある。かなり詳細な会話記録が研究目的のために残されているケースもあるが（例えば White 2007、吉川 2009、ホワイット・モーガン 2007）、言いよどみや細かい相槌まではトランスクリプトに入っていないことが多い。しかし、言いよどみや間、相槌のうちかた、声のトーンなどは、言葉上のメッセージだけでなく、メタメッセージ、つまり問題となっている事柄に対する心的態度、クライアントとセラピストそして物語の登場人物の人間関係に関する心理的情報や解釈の形成に大きな影響を及ぼすことは、インターアクションの社会言語学的談話分析でこれまで明らかにされてきた（代表的なものとして Gumperz 1982、Tannen 1987、1990 等）。

医療現場では、生物医学的なパラダイムに偏りがちだったやりかたとは別の治療への取り組みとして、ナラティブ・ベイスト・メディスンと呼ばれる患者のナラティブを重視した臨床心理学的観点が取り入れられ始めた（斎藤 2002）。心理療法の分野でもナラティブを柱とした治療へのアプローチと実践はますます注目されていると言えよう（野口 2002、2009）。このような動きの中で、これまで別々に研究や実践が行われてきた分野である心理療法の実践としてのナラティブ・セラピーと言語学の研究方法としての談話分析が手を組むことで、新たな視点が生まれてくる可能性がある。ナラティブという形式を手掛かりに、臨床心理の現場におけることばのやりとりを言語学的に分析し、そこで起きているコミュニケーションの状況をさらに深く理解しよう、ということが本稿の目的である。そのために、アメリカで録画されたナラティブ・セラピーの実際のセッションをデータにし、全体で一時間弱のセッションのうち、今回は最初の4分間を中心に言語学的な談話分析を行う。そしてこのような言語学的分析から見えてくる点として以下の4つを取り上げる。

(1) セラピストが持つ治療的イデオロギーがセッションのごく最初の部分においてすでに会話に反映され、その後のセラピーの方向性を形作る。

(2) セラピストが伝えるクライアントとの人間関係や問題に対する心的態度、つまりメタメッセージがラポール形成に影響を与えるが、それは「セラピストとクライアントのチーム」対「問題および問題にまみれたストーリーを作った人々」というポジショニングの構造において顕著に観察される。

(3) さらに、そのようなセラピストとクライアントがとるポジショニングは、問題にまみれたストーリー（problem saturated story）からオルタナティブ・ストーリー（alternative story）へ向かう糸口を提供する。

(4) 上記 (1)、(2)、(3) はセラピストによる質問や再話、および語りの場をクライアントと共有することで生まれる共同作業の語りを通して達成される。

次のセクションでは、本データで取り上げるナラティブ・セラピーの特徴について概観し、そののち、録画データについて述べたい。

## 2. 共同の語りとしてのナラティブとセラピー

ナラティブ・アプローチにおいて考慮すべき点の一つに、本質主義と構成主義という考え方がある（野口 2009）。野口（2009: 20）によれば、この違いは「ナラティブのなかになんらかの本質が隠されていると考えるか、それともナラティブが何らかの現実を構成すると考えるか」であり、前者は本質主義、後者は構成主義と呼ばれる。このような違いは、実践の場面にも大きな違いを生むという。つまり前者では「クライアントの語りからいかにして真実をききとるかの訓練が重要になるし、構成主義の立場にたてばクライアントとセラピストが共同していかにして新しいナラティブを生み出すかが重要になる。」（野口2009: 21-22）という。

ナラティブ・セラピーにもいくつかの種類があるが、本研究でとりあげるのは、後者の構成主義の考え方にに基づき、オーストラリアの臨床家Michael Whiteおよびニュージーランドの臨床家David Epstonによって実践が始まったナラティブ・プラクティスである。本研究におけるデータの中でセラピスト役を務めるStephan Madiganは、ホワイトとエプストンのもとでナラティブ・セラピーを学んだカナダ在住の臨床家である。

ホワイトとエプストンのアプローチは問題の外在化、ドミナント・ストーリーとオルタナティブ・ストーリーの区別といった特徴を持つ。問題の外在化とは、問題の原因ではなく問題そのものを外在化し、問題とクライアントのアイデンティティを引き離すプロセスである（Madigan 2010）。これにより、問題はクライアント自身に内在している（あるいは固定的に存在する）という視点からクライアントは解かれ、それまで支配的だったストーリーに抗することができるようになる（Madigan 2010）。エプストン（2005: 305）によれば、問題の外在化は技術的な操作ではなく、「自分達を不安がらせる問題とのあいだに好ましい関係を展開しようと奮闘している人々について考えたり寄り添ったりするために、生産的で敬意に満ちたあり方を示し、導き、呼び起こそうとする、一つの言語実践」と言える。

次にドミナント・ストーリーとオルタナティブ・ストーリーについてふれておきたい。野口（2009）によれば、これはもともとフーコーの知と権力に関す

る議論 (Foucault, 1980) に由来する考えであり、ある状況を支配し疑いを寄せ付けない物語をドミナント・ストーリーと呼ぶ。そしてそれはしばしば社会の構成員によって当然の筋書きとして受け入れられている。しかし、一旦その筋書きが疑われれば、それはドミナントで在り続けることはできなくなり、オルタナティブ・ストーリーが代わりにあらわれる。両者の区別は状況依存的であり、状況設定や語りの時点によって変化しうるものであるという (野口 2009)。

さらに、Madigan (2010) によればこのような語りの変化はクライアントとセラピストによるナラティブのリ・テリングを可能にする。過去の出来事は、クライアントが語る時、セラピー・セッションという新しい状況の中で再び思い出され、セラピストに向けて語りなおされる。それゆえ、その語りは、「今、ここで、この聞き手に」語りなおされたものである。さらにその語りはセラピストによってしばしば再話され、クライアントは今度は聞き手として再話を聞き、解釈する。このようなインタラクションの中で、クライアントのアイデンティティは再吟味されたり修正されたりするのである (Madigan 2010)。

### 3. データ

本稿のデータとしてとりあげるのは、セラピストが11歳の少年とその母親をクライアントに迎えて行ったナラティブ・セラピーのセッションの一部である。これはセラピスト養成のために作成されたDVDに収録され、専門家による家族療法に関するシリーズの一つである。少年はアメリカ (シカゴ) 在住の11歳のアフリカ系アメリカ人で、学校で暴力事件を起こしたとして起訴されたのち、怒り管理のカウンセリングを受けるよう裁判所から指示された。セラピスト (Stephan Madigan) はもともとカナダ在住の臨床家であるため、セラピストがこの親子と会うのはこれが最初で最後である。<sup>1</sup> なお、本稿ではクライアントの少年を Madigan (2010) が著書の中で使用している仮名 (Jessie) で呼ぶことにする。<sup>2</sup>

#### 会場のセッティング

DVDの画面左からセラピスト、少年、母親の順に並んでいすに座っている。

セラピストと少年の間には低いコーヒーテーブルがあり、コーヒーマグがのっている。セラピストは中年の白人で、膝の上にノート、手にはペンを持っており、セッション中時折メモをとりながら聞いている。セラピストは終始穏やかな笑顔で接し、落ち着いた声で話していた。母親と少年は最初少し緊張した様子であるが、セッションが進むにつれ徐々に表情がほぐれてくる。

## 事件

Jessieは、学校のトイレでクラスメートの少年をズボンのベルトでぶったため、ぶたれた側の少年の親が学校へ連絡し、事件は裁判所へ持ち込まれた。少年は暴行罪で告発され、停学、罰金、奉仕活動等の罰を申し渡された。さらに怒りを管理するためのカウンセリングを受けるように裁判所に命じられ、カウンセラーのもとを訪ねた(今回のセッションが、これにあたる)。

## ビデオ録画について

森岡(2006)は、面談中に記録としてメモをとったりテープにとることによって、そこでの参加者の関係性が変わってしまうため、セラピーの場の再現・報告はケースレポートという形でなされることが多いことを指摘している。そのような事後に書かれた事例レポートを一次資料として使用することに関しては、「むしろ書くということ自体に意味があり、事後に書くということ自体が面接の営みに入っていると考えたほうがよい」(p.159)と述べている。そしてこういった記録は、聞き手の心を一度通過し、感じられたことを記録したものであり、そのことに積極的な意味が見いだされるという(森岡2006)。録画が許されない場合、そのような資料は大切な一次資料となる。しかし、その一方で、もしも録画が許されるのであれば、正確なことばづかいや顔の表情、声のトーンなどの情報を何度でも見直して確認できる、という点でビデオデータが役立つ側面がある。

本データは、実際のセッションを教育目的で録画したものである。Madigan自身、自己のセラピスト養成校で、何度かライブセッションを受講生の面前で行っており、同様のビデオを他にも作成している。ただし、ビデオカメラで写されることが11歳の少年に与える心理的な重荷を考慮して、会話ははじめ母親

とセラピスト中心に展開する。しばらくしてセラピストはようやく少年に、ここまでの母親との話を聞いて、賛成するかどうかをたずねる形で会話へ誘うストラテジーをとっている。ただし、本稿で取り上げるのは、セッション最初でやりとりされた母親とセラピストの会話部分である。

ビデオカメラで録画される、ということは、完全に守秘義務が守られた通常のセッションとは異なる状況であることは否めない。しかし約45分のセッション終了時には、母親がセラピストに、真実のストーリーを語ることができた満足を述べている。以下はセラピーの最後の部分である。なお、本稿においては英語のトランスクリプトの後に、日本語訳をつけ、必要に応じてノンバーバルな情報を〔 〕内に補足した。

### セッションからの抜粋1 セラピーに対する評価<sup>3</sup>

- 1 Therapist: Now we have to wrap things up here.
- 2 Mother: Okay.
- 3 Therapist: How was this for you?
- 4 Mother: This was good. Very good.
- 5 Therapist: Was it alright for you, Jessie?
- 6 Jessie: Yeah.
- 7 Therapist: Do you have any final words that you would like to say?
- 8 Mother: I would like to say I didn't know we would get to tell the story but it is a true story.
- 9 Therapist: And I just want to tell you that I really believe your story. And I'd like to stand behind your story in any way I can.

1. セラピスト：では、このへんで終わりにしなくてはなりません。
2. 母：わかりました。
3. セラピスト：このセラピーはあなたにとってどうでしたか？
4. 母：良かったです。とても良かったです。[微笑みながら]
5. セラピスト：君にとっても大丈夫だったかい、ジェシー？
6. ジェシー：うん

7. セラピスト：最後に言いたいことは何かありますか？
8. 母：わたしが言いたいことは、この物語を話すことができるなんて思わなかったけれど、それは本当の物語だということです。
9. セラピスト：そしてわたしもあなたの物語を本当に信じていることをお伝えしたいです。そしてできる限りあなたの物語の支援をしたいと思います。

このように、ビデオ録画（メモも、帰りに持ち帰ることができるとした上で母親の許可を得て書きとめている）という状況でありながら、母親は最後に、セッションが満足度の高いものだったと評価した。「本当の物語」を語ることができた、とクライアント自身が考え、「とても良かった」と笑顔で述べていた。ビデオに録画されたセラピーという枠組みの中ではあるが、実際のやりとりの録画記録が少ない中で、このようなビデオデータを分析することは意義のあることと考える。

以下、セラピーの最初の部分の展開を順に追いながら、来訪の目的と問題の所在、問題というレッテルを貼った側の明確化、セラピストとクライアントの関係に関するメタ・メッセージ、ラポール形成について探っていく。

#### 4. 来訪の目的と「問題」の所在

セッションはセラピストとクライアントの簡単な挨拶から始まる。録画に先立ち、すでにセラピストとクライアントの親子は、どこに住んでいるのか、といったスモールトークを廊下でとりかわしていたという。あいさつの後は、セラピストが、これからどのようにセッションを進める予定かをクライアントに説明する。つまり、45分から50分ほど話し、その後もし質問があればそのための時間をとるというものである。そして来訪の目的をセラピストがたずねる。

これからみる会話は、セラピー・セッションの初めの方で、セラピストは自己紹介およびセッションの進め方について説明した後、「自分のようなカウンセラーという人間に会いに来てくれた理由」をたずねる場面である。この質問により、problem saturated story（問題が浸み込んだストーリー）とナラティブ・

セラピーにおいてしばしば呼ばれるストーリーがここで母親からまず語られる。

## セッションからの抜粋2 母親が語る、セラピーにきた目的

- 1 Therapist: But I guess what I'm most interested in tonight is um why it is that you have come to see someone like me, in counseling or a counselor at this particular time.
- 2 Mother: Okay, well my son Jessie, he had a problem at school? and it went to the court. So then at that point they ... asked about us seeking counseling for him,
- 3 Therapist: Okay, okay
- 4 Mother: About like anger counseling?
- 5 Therapist: Okay, okay.

- 1 セラピスト：今夜私が一番興味があるのは、えー、なぜあなたがわたしの  
ような者に会いに来られたのか、カウンセリングまたはカウンセラー  
に、この時点で来られたのか、ということです。
- 2 母：わかりました。えっと、私の息子のジェシーですが、彼が学校で問題  
があつて？ それが裁判所に行ったんです。それで、その時点で、彼  
らは…息子にカウンセリングを受けるよう求めました。
- 3 セラピスト：ええ、ええ
- 4 母：怒りのカウンセリングのようなもの？
- 5 セラピスト：ええ、ええ

このセッションにおけるセラピストであるMadiganは著書（Madigan 2010）において、この時のやりとりを分析しているが、それによれば、彼は常に来訪の目的をたずねる質問からセッションを始めるといふ。これは、“at this particular time”と発言1で述べている通り、過去に起きた何らかの出来事を現在のコンテキストにおき、現在の自分たちにどのような意味があるからここに来たのか、という視点から語ってもらうためである。

この質問に対して、母親は、「息子が学校で問題があり、それが裁判所へ行っ

たんです。それでその時点で、彼らは..息子にカウンセリングを受けるよう求めました。」(発言2)「怒り管理のカウンセリングのようなもの?」(発言4)と答えている。

この時点では、学校で起きた問題がなんであったのか、詳細は母親の口から明らかにされない。しかし、裁判所にまで事件が行き、裁判所の命令によるカウンセラー訪問であることを告げるだけでも母親にとっては心の負担が大きいであろう。特に録画が行われている最初の時点であることを考えれば、なおさらのことと思われる。

また、ここで注目しておきたいのは、“they .. asked about us seeking counseling for him”という発言である。この*they*は誰を指すのか? 文脈から考えるならば、直前の*the court*を指すと思われる。*They*はしばしば*we*との対比において、直前の先行詞だけでなく、心理的に外の人間をさすメタファーとなる(Gumperz 1982)。*We*が内側の人間であるならば、*they*は親しい関係の外にいる、冷たい関係である。この母親の発言はただ単に先行詞の*the court*を受けるだけでなく、問題にまみれたストーリーに関わった人間関係をメタファー的に示している可能性もある。

この間セラピストは“okay, okay”と繰り返して相槌をうちながら、聞き取った内容に基づき、来訪の目的を再話する。

### セッションからの抜粋3 セラピストによる再話 (メモをとることについて許可を得た後で)

- 1 Therapist: So um there was um uh some trouble at school?
- 2 Mother: Yes
- 3 Therapist: That went to the courts and the courts then suggested that you -
- 4 Mother: Seek counseling for him.
- 5 Therapist: Seek counseling, okay. And um did you say something that it had to do with, um in your opinion, something to do with anger?
- 6 Mother: Right.

- 1 セラピスト：そう、えっと、学校で、えっと、えー、何かの問題があった？
- 2 母：はい
- 3 セラピスト：それが裁判所に行き、そして裁判所は提案をしたんですね、  
あなたがたが―〔ノートにメモを書く〕
- 4 母：カウンセリングを彼が受けるように、と
- 5 セラピスト：カウンセリングを受けるように、と。わかりました。そして、  
う〜んと、あなたは何かそれが、えっと、あなたの意見では、何か怒  
りと関係があるとおっしゃいましたか？
- 6 母：そうです。

セラピストは、母親の発言を追いながら、何がこの親子をカウンセリングへ来させることになったのかを確認をする。ここで興味深いのは、問題を起こした agent に関する語り方である。母親は抜粋1では “he had a problem at school” と述べ、カウンセラーは、“there was um uh some trouble at school” と述べている。どちらも少年が問題を起こした直接の原因、とは言っていない。しかし、母親とカウンセラーのことばを比較すると、そこにはいくつかの違いがあることがわかる。

母：he had a problem at school

セラピスト：there was um uh some trouble at school?

母親は “he had a problem” (直訳するならば「息子が問題を持っていた」) と表現するが、カウンセラーのことばには、問題を所有する行為主体 (agent) は特定されていない。また、カウンセラーが、*trouble* という語を発する前に、*um uh* と言い淀み、さらに *some* をつけて、*trouble* と端的に言うことを和らげている。これは少年をとりまく状況を *trouble* という語で単純に表現することにセラピストがためらいを感じていることを示唆しているのではないだろうか。

一般的に考えれば、少年が起こした暴行行為は *trouble* と表現することに大きな支障はないはずである。しかし、学校で起きた出来事を *trouble* と誰の視点からとらえるのか、その問題は今現在この親子にどのような影響を与えているの

か、クライエントのことばを受け止めつつ、事件のagentの表現の仕方、そして問題の所有者の設定の仕方に、カウンセラーの配慮が認められるであろう。これはカウンセラーが事件に対してとる心的態度の反映とも考えられる。

発言3と4では、カウンセラーとクライエントが共同作業を通して事件の確認を行っている。カウンセラーの発言（「裁判所はそれからあなたにー」）は途中から母親に引き継がれて（「息子にカウンセリングを受けるように、と」）、その母親のことばをさらにカウンセラーが復唱する。このようにいったんクライエントによって語られたストーリーをカウンセラーがもう一度語りなおし、クライエントは聴き手として出来事を聞く。しかし再話のプロセスはカウンセラーが一方的に行うというよりも、クライエントとの共同作業により、ことばを確認しながら語られていくのである。共同作業としてのナラティブという側面を象徴的に示しているのが、二人で一つのセンテンスを組み立てたこの部分ではないだろうか。

さて、来訪の目的について話す中で、カウンセラーが特に慎重に確認しようとするのは、「怒り」ということばであったと思われる。怒りの管理カウンセリングを受けるように命じられるというのは、つまり、裁判所や学校側から「怒りのコントロールに関して問題を抱えている少年」というレッテルを貼られたということである。心理療法が必要な少年、しかもそれは怒りに関連したセラピーが必要である、との所見を裁判所が下したのである。

ここで浮き上がってくるドミナント・ストーリーの要素の一つは、裁判所が「怒り管理が必要」という診断をその権威のもとに下しているという点である。学校で暴力をふるう、凶暴な少年は怒り管理のカウンセリングを受けるべきである、という筋書きがそこにはある。しかし本当に怒り管理のセラピーが必要かどうか、何を証拠に誰が判断したのであろうか？ ここにすでに問題にまみれたドミナント・ストーリーが浮上している、とカウンセラーは考える。どれだけ凶暴であれば、凶暴と認定され、怒り管理のカウンセリングが必要な範囲にある、と診断されるのであろうか？ 絶対的な権威をもって命令が裁判所から下された時、それに反論する社会的権力を、この母親も少年も実質上持ち合わせていない。だからこそ、セラピストの見解、社会的な立場が、この少年と母親には大きな影響を与えうるのである。この点に関して、著書の中でMadigan

(2010: 73) は、“It was my understanding that Jessie was not in need of anger management counseling (and this was good because I don’t know how to ‘do’ anger management counseling, nor am I interested in doing it).” [私の理解ではジェシーは怒り管理のカウンセリングは必要なかった（そしてこれは有り難いことだった。なぜなら私は怒り管理のカウンセリングなどどう“やる”のか知らないし、興味もないからだ）] と述べて、裁判所の命令による怒り管理のカウンセリングの必要性をセラピスト自身が疑っていたことを明らかにしている。

## 5. 問題のレッテルを貼ったのは誰か？

さて、セラピストとクライアントによる来訪目的の確認のあと、すぐに、このセッションにおける重要な問いかけがセラピストからなされる。それは「誰の視点からみたストーリーか？」という点に深く関わる。次の会話抜粋4は、セラピストが、問題にまみれたストーリーは、誰のことばによるものかを明確化するために、「それはあなたのことばですか、裁判所のことばですか」という質問をする場面である。

### セッションからの抜粋4

- 1 Therapist: Seek counseling, okay. And um did you say something that it had to do with, um in your opinion, something to do with anger?
- 2 Mother: Right.
- 3 Therapist: And would that be your word or the court’s word?
- 4 Mother: The court’s word
- 5 Therapist: The court’s word. What, what um what word would you use?

1. セラピスト：カウンセリングを受けるように、と。わかりました。そして、えっと、あなたは何かそれが、えっと、あなたの意見では、何か怒りと関係があるとおっしゃいましたか？
2. 母：そうです。
3. セラピスト：そしてそれはあなたのことばですか、それとも裁判所のこと

ばですか？

4. 母：裁判所のことばです。

5. セラピスト：裁判所のことばですね。あなたは、どの、どのようなことばを使いますか？

セラピストは、カウンセリングを受けにきたことの主な目的として、怒りのコントロールとの関係を確認する。しかしその際、怒りのコントロールの必要を「誰が抱えているのか」注意深く明らかにしようとする。セラピストの発言3では、この「怒り管理」とは誰のことばであるか、質問がなされる（“Would that be your word or the court’s word?”）。そしてそれが裁判所のことばであるとの母親の答えを受けて（“The court’s word”）、セラピストは「では、あなたは、どの、どのようなことばを使いますか？」（“What, what um what word would you use?”）と少し言いよどみながら質問を続ける。

「それは裁判所のことばですか、あなたのことばですか」と言うこの質問の果たす役割は大きい。クライアント親子を悩ましている問題の正体は、ジェシーが怒りを管理できないことなのか、それともそれはこの親子以外の誰かが言っていることなのか？ もしクライアント以外の人が言っていることならば、母親自身はジェシーが必要なものを何と呼ぶのか？

DVD付属の会話スクリプトに記載されたMadiganのコメントによれば、彼はこのような質問をして、クライアント自身がことばによって問題の所有者や問題の所在を明らかにしていくことが、社会的にドミナントなディスコースから、クライアント個人のいわばローカルなディスコースへ移っていくうえで重要と考えているという。

The languaging of problems and the location of this language bring forth difference – a tension of understandings that open up meaning about the problem and the person. I feel a strong desire in therapy to privilege the client’s language and understandings of the problem. In this way we begin to move toward local discourse and understandings and away from dominant language and understandings located in the

professional expert domain. (p. 24)

問題の言語化と、その言語の所在は、違いを生み出す―すなわち、問題と当事者に関する意味を広げるような理解の緊張関係をもたらす。私はセラピーにおいて、問題に対するクライアントのことばと解釈に特権を与えたい、という強い願いを感じている。このようにして我々はローカルなディスコースと理解へと向かっていきはじめるのだ、「専門家」の領域のドミナントなことばと理解から離れて。

このような質問をセラピストがすることにはどのような意味があるのだろうか？ 一つには、これはセラピストの社会構成主義的なスタンスを示していると言える。社会的にドミナントなストーリーから脱却するための一つの方法として、誰がどのようなレッテルを貼ったのか、を明らかにすることから始めようとセラピストはしている。そしてレッテルを貼ったのが誰であるかが明確になったならば、問題となっている状況をクライアント自身はどう呼ぶことが妥当と考えているのかを探る。このプロセスによりクライアントにとって望ましいアイデンティティを保ち、クライアント自身によるストーリーが語られる可能性が生まれる。このような質問は、また *re-authoring*（再著述）とナラティブ・セラピーで呼ばれるプロセスに深くかかわる。Madigan (2010: 170) によれば、*re-authoring* は新しい、望ましい行動や状況解釈を生み出すことをクライアントに励ますという。エプストン（2005: 305）もまたこの点について、セラピストの質問による問題の外在化の効果を次のように述べる。

人と「問題」との重要な再編成は、上記のような問題を外在化する質問の中で生じる。つまり、自分自身が問題を持っているとか問題であると考えよりむしろ、問題との関係性の中で（客観化や擬人化を通して）自分を見つめることによって、ただちにその関係性を再検討する可能性が開かれるのだ。

このように、自分＝問題という関係性から抜け出す言語実践として、セラピス

トの「誰のことばか」という質問は非常に重要な役割を果たしていると言えよう。

## 6. 間違っているのは誰か？

5 で述べたような、新しい関係性理解を可能にする質問は、問題のレッテルが誰のことばによって貼られたか、という確認にとどまらない。その次にセラピストがたずねるのは、間違っているのは誰か、を問う質問である。

セラピストに促されて、母親は、息子には怒り管理のカウンセリングは必要ないと考えていることを告げる。しかし、裁判所からの命令であれば、逆らうことはできないことも合わせて述べる。そのあと、セラピストは、「それでは裁判所は何を間違ったと思いますか」とたずねる。

### セッションからの抜粋5

- 1 Mother: Okay, my opinion, I don't think he needed counseling, but once something goes to court, then you have to .. follow whatever they say to take.
- 2 Therapist: Right. So what do you think they got wrong?
- 3 Mother: Okay, say that again.
- 4 Therapist: What is it you think that the court may not have seen in Jessie that maybe you see in Jessie and that um what they would call anger, you, you call something else. What, what would you call it?
- 5 Mother: Hmm just a .. a good talking to?
- 6 Therapist: A good talking to?

1. 母：[しばらく考えた後] ええ、私の意見では、彼はカウンセリングが必要だったとは思いません。[少し微笑む] でもいったん事が裁判所まで行けば、…従わなくてはならないのです、彼らがやりなさいということは何でも。
2. セラピスト：そうですね。それでは、彼らは何を間違ったと思いますか？

3. 母：「考えるような表情で」はい、もう一度言って下さい。
4. セラピスト：裁判所がジェシーの中にみていなかったかもしれないけれども、あなたがおそらくジェシーの中にみているもので、えっと、彼らが怒りと呼ぶものを、あ、あなたは何か他に呼ぶとしたら、あなたはそれを何と呼びますか？
5. 母：う～ん、「少しほほえみを浮かべて」ただ…よく言って聞かせること？
6. セラピスト：よく言って聞かせること？

このやりとりで、特にセラピストの発言2の質問に注目したい。母親がカウンセリングを必要ないと思っているとしたら、それでは怒りのカウンセリングを受けるように命令した「彼らは何を間違ったと思うか」という質問である。

この質問を文字通りの意味のメッセージレベルではなく、会話参加者の人間関係や会話および登場人物に対する心的態度を示すメタメッセージのレベルで考えてみたい。彼らを「間違った」と位置づけることで、クライアントの解釈が正しいという可能性をセラピストが支持していることをこの質問は示唆する。これは、裁判所の指示には（たとえ納得がいかなくても）従わなくてはならない、という弱者の立場にいるクライアントに、別のステイタスを与えてくれる。裁判所よりも少年のことをよく知っている母親として、裁判所の間違いを指摘する立場に母親を移動させるのである。そして、この質問はさらに、セラピストとクライアントの関係についても、彼らが同じ側に属することを意味する。すなわち、クライアントとセラピストが共同で、裁判所または「彼ら」と呼ばれる人々に対して、その間違いを明らかにしようというポジショニングである。

セラピストがクライアントを受容し、話に対して共感的傾聴を行うことはカウンセリングにおける基本と言われる。しかし、「裁判所は何を間違ったのか」という質問は、セラピストがクライアント親子に共感し同じチームに入ることがを表明するだけでなく、裁判所が押し付けたストーリーへの抵抗をも表している。大きな権力をもって押し付けられた裁判所の「怒り管理カウンセリングのストーリー」は、絶対的に正しくて服従すべきものではなく、セラピストがまずそのストーリーに疑問を投じ、オルタナティブ・ストーリーを発展させることへ母親を招き入れる質問なのである。

この、「裁判所が間違った」ことをたずねる問いに、母親は「もう一度言ってお下さい」と依頼する。あたかも、裁判所を間違い扱いする白人のセラピストのこのような質問がすぐには理解不能であるかのようである。

母親からの依頼を受けて、セラピストは質問の投げかけ方を変え、二つの互いに関連した質問に分けてたずねる。

- (1) 裁判所がジェシーの中に見ていなかったかもしれないが、母親としてあなたがジェシーの中に見ているものは何であるのか
- (2) 裁判所が「怒り」と呼ぶものにあなたが別の名を与えたとするならば何と呼ぶのか

(1) は、裁判所で語られなかったストーリーを語ることへの促しでもある。この質問の前提は、裁判所はジェシーに関して偏った一面的なストーリーしか把握していなかった可能性があるということである。従って、裁判所の知らない、ジェシーのストーリーの存在に目を向けさせる質問でもある。そして (2) は否定的なレッテルの貼りかえを促す。感情をコントロールできず、怒りを爆発させる少年という位置づけから、怒りのカウンセリング治療を特に必要としない少年へと、アイデンティティ変化の糸口となる質問と言える。事件と少年のアイデンティティを分離させ、セラピストが母親の見解を大事にしていることを伝える質問でもある。このような質問がもたらすメタメッセージ（セラピストとクライアントおよび裁判所との人間関係をセラピストがどうとらえているか、に関する情報）は、この母親の後のストーリー展開に影響を及ぼすと考えられる。すなわち、セラピストが裁判所側ではなくクライアント側にあくまでも立つことを示すことは、そのあとの母親のストーリー形成において、裁判所の判断に対する反対意見を述べやすくさせる。

実際、こののち母親は息子に必要なものは、（怒り管理のカウンセリングなどではなくて）ただよく言って聞かせることで十分だと思っていることを伝えた。裁判所の判決に反するオルタナティブ・ストーリーを語り出す時、母親の表情がゆるみ、少しほほえみが浮んだ。

## 6. Theyとは誰か？

少年に必要なものは治療としての怒り管理のカウンセリングではないとしたら、彼に必要なものを「あなたは何と呼ぶのか？」との問いに対して、「ただよく言い聞かせること」と母親は答えた。これが引き金となって、少年はわざと相手を傷つけようとしたわけではなかったが、「彼ら」は誤解したという、「彼ら」とクライアントの対比が出てくることとなった。ここでは、「彼ら」とは誰かをめぐる、会話の展開を見ていきたい。

### セッションからの抜粋6

- 1 Therapist: What, what would you call it?
- 2 Mother: Hmm just a .. a good talking to?
- 3 Therapist: A good talking to?
- 4 Mother: Tell him, tell him, tell him to um take something um to do something a different way instead of – well what he did, he wasn't trying to hurt someone but they thought he was.
- 5 Therapist: Hmm, hmm.

1. セラピスト：何、何とあなたはそれと呼びますか？
2. 母：う～ん、[少しほほえみを浮かべて] ただ…よく言って聞かせること？
3. セラピスト：ただよく言って聞かせること？
4. 母：彼に言い、言い聞かせる、えっと、言い聞かせることです、他の方法で代わりにするように、と一ええ、彼のやったことは、誰かを傷つけようとしたわけではありませんでしたが、彼らは彼が意図的にやったと思ったのです。
5. セラピスト：うん、うん

「彼ら」の描く筋書きでは、ジェシーは意図的に他者を傷つけたのであり、そのような暴行行為は厳しく処罰することが適切となる。一方クライアント親子のストーリーは、子ども同士のふざけあいなのに、それを周囲の大人が誤解して

大騒ぎになった、ということになる。この点に関して、こののち事件の詳細に関して母親が語り、再び「彼ら」が登場する。

### セッションからの抜粋7

- 1 Mother: It really was just a kid thing; it wasn't a big thing. It was just that they made a big thing out of it.
- 2 Therapist: I see. And the "they" is who?
- 3 Mother: The parents.

1. 母：それは本当にただ子どものやったことで、大したことではなかったんです。ただ、彼らが大騒ぎしたんです。
2. セラピスト：なるほど。それで「彼ら」とは誰ですか？
3. 母：両親です。

この「『彼ら』とは誰ですか？」という質問をした背景に関して、Madiganは、フランスのポスト構造主義哲学者フーコーを引き合いに出しながら、社会が問題をいかに生成し、それをあたかも当然のこととして維持していくかという視点に戦う必要を述べている。

Similarly, the French post-structural philosopher, Michael Foucault, encouraged us to question and critique taken-for-granted notions of dominant understandings of personhood. I wanted to know who was involved in this story of Jessie needing to come to court-ordered therapy, how this story first began, what political ideologies might be affecting this story, how the story was being maintained and for whose benefit. (DVD Instructor's manual, p. 26)

同様にフランスのポスト構造主義哲学者フーコーは、人間性に関して当然のこととして受け入れられたドミナントな理解を疑問視し批判するように私たちを励ましています。私は知りたかったのです、ジェシーが裁判所

の指示によるセラピーが必要だというストーリーに誰が関与しているのか、どのようにしてこのストーリーが最初に始まったのか、どのような政治的イデオロギーがこのストーリーに影響を与えているのか、誰の利益のためにどのようにこのストーリーが維持されてきたのかを。

さてここまでで明らかになった母親のストーリーをまとめてみると、次のようになる。

ジェシーは学校のトイレで、他の少年をベルトでぶった。相手を傷つけるつもりはなくふざけていただけだが、相手の少年の両親が大騒ぎをして学校へ電話をし、事件は裁判所まで行った。そしてジェシーは暴力行為で有罪判決を受け、本来必要ではない怒り管理のカウンセリングを命じられたためここへ来た。

一方で「彼ら」のストーリーは、

ベルトで他の生徒に危害を加えるという暴力行為を校内で行った少年は危険人物であり、処罰とともに怒り管理のカウンセリング指導が必要である。

となる。上の会話抜粋7では、「彼ら」は相手の少年の両親を指していたが、Madigan (2010)によると、セラピストに知らされていた情報では、ぶたれた少年の親、学校長、スクールカウンセラーがこの少年を裁判所に送ることに賛成し、裁判所がカウンセリングを受けることを指示したという。これらの人々が「彼ら」のストーリー作りに貢献したグループに入るであろう。しかし、どこまで厳しい処罰が妥当だと考えるか、は関係者によってそれぞれ異なっていたようである。例えばぶたれた少年の母親は、実はそこまで厳しい罰を予想していたわけではなかったという。そのため、あまりにも厳しい判決に驚いた相手の少年の母親が、ジェシー親子に謝った、というエピソードがあとで母親から明かされる。いずれにせよ、「彼ら」のストーリーが、ジェシーを反社会的問題児という登場人物として位置づけ、ジェシーの側からみたストーリーとは異なる

様相を呈することになった経緯が母親のストーリーから徐々に明らかになっていった。

この時点でセラピストは、「事件」についての詳細を語りたいかどうか、母親に意志をたずね、促す。そして、母親から物語の新しい側面が、息子の話の再話として語られる。その新しいストーリーとは、最初に相手の少年の方が息子の手をぶったこと、相手の少年も自分の息子もふざけていただけであって、傷つける意図はなかったというのである。なお、先にぶった少年は白人であり何の処罰も受けていないことも、セッションの後半になって明らかになった。

### セッションからの抜粋8

- 1 Therapist: Hmm. Do you want to tell what happened or is that important?
- 2 Mother: No, he said that he was in the bathroom? he and another boy? and that the boy hit him on the arm. They weren't fighting.
- 3 Therapist: Yes
- 4 Mother: The boy went out the bathroom he say and he come back in, he say that he hit him, he take his belt off and hit him with the belt. That do sound, it doesn't sound right, hit someone with a belt.

1. セラピスト：うーん、何が起きたか、話したいですか？ それは重要ですか？
2. 母：いえ、息子が言っていたのですが、彼はトイレにいたんです、彼と相手の少年は？ そして、その少年が息子の腕をぶったんです。彼らは喧嘩をしていたのではありません。
3. セラピスト：はい。
4. 母：彼はトイレから出て行き、また戻ってきて、息子によると彼は相手をぶったのです。ベルトをはずして、彼をベルトで。それはたしかに、正しいこととは思えません、ベルトで誰かをぶつことは。

相手の少年が先にぶった、という新情報は、反社会的な危険分子という少年の位置づけを、異なる立場の登場人物へと変化させる。つまり暴力をふるったと

いう点では相手の少年の方が先であり、ジェシーだけが厳しい処罰を受けるのは不当な扱いの可能性がある。「ベルトで他人をぶつ、というのは、確かに正しいことではないけれども」と母親は述べつつ、この時点で語られた話は裁判所や学校がいうような危険人物による意図的暴行行為ではなく、ごく普通の少年達がふざけあいをしていた結果であるという新しい解釈の可能性を呈するのである。「彼らは喧嘩をしていたわけではありません」(発言2)と母親が言ったあとすかさずセラピストは相づちをいれ、母親のことばを受け止める。

このあとのセッションでは相手の少年が白人であること、他の学区にいたときには息子はこの種の問題はなかったが、今の学区に無理やり移されてからは黒人の生徒は自分の行いについて(白人よりもずっと)よく注意しないと学校側が大問題にすぐ取り上げがちであること、息子が通う学校ではアフリカ系アメリカ人の生徒が少なく、先生自身が黒人の生徒の取り扱いに慣れていないと述べていたこと等、人種に関わることで母親によって語られていく。

何が「間違っ」ただのふざけあいがこのような大きな事件として処罰される展開となったのか? その答えとして、相手の少年の両親の存在がジェシーの母親の口からまず挙げられた。しかし、この問題が浸みついたストーリー(problem saturated story)は人種差別という大きなドミナント・ストーリーの存在を指し示す。そのような社会権力に押し付けられたドミナント・ストーリーに抵抗するというスタンスをもったセラピストは、さまざまな質問を投げ、クライアント親子にとって望ましいオルタナティブ・ストーリーの出現を可能にした。そして少年のアイデンティティはごく普通の良い少年として登場するストーリーへとこのあと語りなおされることとなった。本稿ではそのセッションの最初の部分しか取り上げられなかったが、セラピーのごく初期にすでにその方向が形作られていくプロセスを示した。セラピーの後半については是非また別の機会に分析をしたい。

## 終わりに

ナラティブ・セラピーにおける実際のセッションを細かく談話分析することで、これまでのケースレポートや会話記録からさらに一歩踏み込んでセラピー

のプロセスを詳細に示した。その結果セラピストの社会構成主義的アプローチがクライアントとのラポール形成、セラピーの方向性に大きな影響を与えていることを言語学的に示した。Madiganが行ったナラティブ・セラピーはそのアプローチの根底に、社会のマジョリティによって正当化されたドミナント・ストーリーがもつ歪曲され偏った解釈に抵抗する、というスタンスがある。このことが、例えば”What do you think they got wrong?”という質問に象徴的に表わされた。また「怒り管理が必要というのは誰の言葉か?」という質問によって、問題を作り上げることに関与した社会権力によるドミナント・ストーリーの存在への気づきが、クライアントとの共同作業の中で達成されていった。これらの点をまとめると、以下のようになる。

(1) セラピストが持つイデオロギーがセッションのごく最初の部分においてすでに会話に反映され、その後のセラピーの方向性を形作る

(2) セラピストがクライアントや問題に対して持っている心的態度がことばの選び方や言い方によってメタメッセージとして伝わり、ラポール形成に影響を与えるが、それは「セラピストとクライアントのチーム」対「問題および問題にまみれたストーリーを作った人々」というポジショニングの構造において顕著に観察される。

(3) さらにセラピストとクライアントが問題形成に関わった「彼ら」と呼ばれる人々に対してとるポジショニングは、問題にまみれたストーリーからオルタナティブ・ストーリーへ向かう糸口を得る上で重要な役割を担う。

(4) 上記 (1)、(2)、(3) はセラピストが行う具体的な質問や再話、および語りの場をクライアントと共有することで生まれる共同作業を通して達成される。

通常、セラピーの治療記録は、ここまで細かくセラピストとクライアントのやりとりを分析しないであろう。しかし、ビデオ録画という貴重な資料に基づき、言いよどみやことばの選び方、表情等を細かく見ていくことで、最初の数分間ですでに示唆されるセラピーの方向性とセラピストの社会構成主義的アプローチを明らかにした。今回はたった1回のセラピーの分析であったが、ホワイト、エプストン、マディガンらが提唱するナラティブ・セラピーの根底に流れるイデオロギーは、他のセッションでも共通する。また、このDVDが、ナラティブ・セラピーのトレーニング教材として用いられている点を考えると、こ

のセッションがナラティブ・セラピーの手法を示す一つの良いモデルとして受け入れられていると考えてよいであろう。

セラピストのイデオロギーがどこまでセラピーに入り込むことがゆるされるのか、といった疑問は当然であろう。しかし、そもそもセラピー・セッションそのものが、大きな社会・文化のコンテキストの中に埋め込まれており、セラピストもクライアントも、ナラティブの登場人物も、そのことから完全に解放されることは難しい。誰のためのセラピーなのか（怒り管理の方法を暴力的な人に教えて公共の安全を保つことが究極の目的なのか、人種的社会的マイノリティとして差別的扱いを受けている未成年者の健全なアイデンティティを育てることなのか）、セラピーを通して達成しようとしていることは何かによって、セラピストがもたらす影響も変わってくるのではないだろうか。

今後も言語学的な視点からの談話分析は更に必要であろう。例えば、今回は取り扱えなかったが、談話標識の *okay* や、クライアントの African American Vernacular English の使用とセラピストの標準英語の使用の影響、少年自身の語りのことばと母親のストーリーとの関連も、セラピー・セッションを読み解く上で重要となるであろう。セラピーのテクニックやスキルではなく、いかにラポール形成が言語にも反映され、さらに互いのポジショニングの取り方がメタメッセージのレベルで語りに影響を及ぼすのか、セラピストの社会構成主義的アプローチがいかにことばの選び方と言い方に具体的に反映されるか等、言語学的な視点から示唆するものは大きいと考える。

## データ DVD

Psychotherapy.net. *Narrative Family Therapy with Stephen Madigan, Ph.D.* Institutional/Instructor's version.

## 参考文献

- エプストン, デイヴィッド 2005. ナラティブ・セラピーの冒険 小森康永監訳 創元社  
Foucault, M. 1980. *Power / Knowledge*. New York, NY: Pantheon Books.  
Gumperz, John. 1982. *Discourse Strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.  
ホワイ特, M・モーガン, A 2007. 子どもたちとのナラティブ・セラピー 小森康永・奥野光訳 金剛出版

- Madigan, Stephan. 2010. *Narrative Therapy*. Washington DC: American Psychological Association.
- モーガン, アリス 2003. ナラティブ・セラピーって何? 小森康永・上田牧子訳 金剛出版
- 森岡正芳 2006. 語りを生む力 能智正博編〈語り〉と出会う ミネルヴァ書房 p.155-159.
- 野口裕二 2002. 物語としてのケア 医学書院
- 野口裕二 2009. ナラティブ・アプローチ 勁草書房
- 能智正博編 2006. 〈語り〉と出会う ミネルヴァ書房
- 斎藤清二 2002. ナラティブ・ベイスト・メディスンとカウンセリング 富山医科薬科大学看護学会誌第4巻2号 pp.7-13.
- Tannen, Deborah. 1987. *That's not What I Meant*. NY: Ballantine.
- Tannen, Deborah. 1990. *You Just Don't Understand*. NY: Ballantine.
- White, Michael. 2007. *Maps of Narrative Practice*. NY: W・W・Norton.

- 
- 1 このセッションを録画したDVDは、セラピストのトレーニングのために作成され米国内で市販されている。筆者が購入したのは、授業等での指導用で、教授用マニュアルとスクリプトが付いている。
  - 2 DVDの中では、少年は別の名で呼ばれているが、個人情報配慮して、ここでは仮名を用いる。また、Jessieの年齢について、Madiganの著書とDVDでは11歳と12歳の両方の記載があり、どちらであるのか特定が難しい。
  - 3 トランスクリプトで使用した記号は、以下のとおりである。  
? : 上昇のイントネーション、.. : 短い間、um, uh: 言い淀み、[ ] : しぐさや表情